

「音速」Fレース 進むデジタル革命

アジア最高峰のフォーミュラーカーレース「全日本スーパーフォーミュラ選手権」の舞台で情報通信技術（ICT）によるレースデータの「見える化」が進んでいる。参戦チームを支援するICT各社が刻々と変化するマシンやドライバーの生体情報などをデジタル化。このデジタルデータを解析して最適なレース戦略の策定につなげる狙いだ。ICT各社の最先端技術は、顧客への自社サービスのアピールにもなる。（水嶋真人）

TCCSの参入

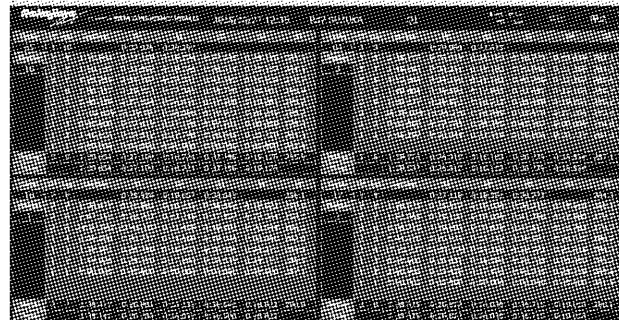
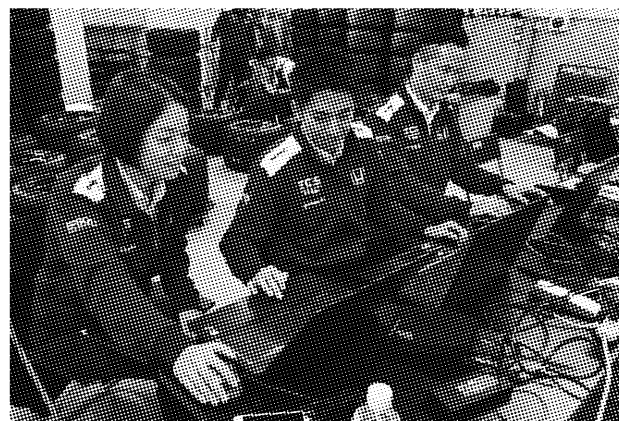
10月27-28日に三重 援もしており、ライバル県鈴鹿市の鈴鹿サーキットチームを含む各車種で開催された20のセクター（区間）ごとの18年シーズン最終とのレースタイムと最速。4人の年間王者を高速を収集し、モニタ

全チームのタイム 即収集し一覧表示

「TCCSナカシマレーシング」のピットには、複数台のノートパソコンを並べてレースデータを収集する日本タタ・コンサルタンシー・サービシス（日本TCCS）の社員が姿があった。インドのITサービシス最大手TCCSは、17年からナカシマレーシングのタイムレスポンスを稼げ、このため、日本TCCSの社員が手書きで記録するしかなかった。このため、日本TCCSはモニターに映し出された周回情報の画面を、1秒ごとに画像ファイル化。文字認識システムでデータ化し、データベースに保存するシステムを構築した。

日本TCCSの井原一氏は、「クラウド基盤を通じて、エンジニアのタブレットにもデータを配信できるようになった」と工夫を話す。

TCCSナカシマレーシングのピットでレースデータを収集する日本TCCSの社員。日本TCCSが提供したタブレットと最高速の一覧表示システム



ICTで最適戦略

国内ICTも続く

NTTドコモがタイムレスポンスの「ドリフト」などの走行情報、コモチームタンデリアンレーシングの映像を合IAアンレーシング」を併せて分析することで、東レとNTTグループが共同開発した新素材「ヒトエ」でドライバーの生体情報を計測する実証実験を実施。ヒトエを用いたドライバーシャツで、ドライバーの心電波形や心拍数、上腕部や胸部の筋電を計測した。



ダンディライアンはヘルメットに文字情報を表示できるディスプレイを装着した実証を行った（JDI提供）

とは透過率80%の透明カラーディスプレイをヘルメットに装着し、チームスタッフやドライバーに伝達できるよう行った。ダンディライアンレーシングの村岡井昭人氏は、「直近の潔監督は、「レースに勝つ技術を活用したいチーム側と、最先端技術を実証する。極限の場々の欲しい企業との間でウインウインの関係ができていたことが大切だ」と語る。

メンタル数値化 育成に活用

AIスピーカーが情報伝達

元レーシングドライバーの金石勝智監督が率いる「リアルレーシング」も、アビームコンサルティング（東京都千代田区）の支援を受け、レース中の各種データをリアルタイムで得られるデータベースをクラウド上に構築している。特徴はデータを音声化し、後続車との差が詰まってくる、人工知能（AI）の支援を

深層 SPECIAL EDITION 断面